

図拡大

第十四章 北周と北斉との抗争の背後に介在する木杆可

汗の勢力

第十五章 北周武帝と他針可汗との関係

第十六章 龐仏の目的とこれを企図した時期について

第十七章 三武一宗の法難と周武法難の位置

年表
索引

(東出版刊)

現代に生きる宗教者の証言

日本宗教者平和協議会 編

本書は、今日まで宗教者として平和運動に取り組んできた三十三名の宗教者の証言集である。

北海道から沖縄に至るまでの全国各地における平和をめざす宗教者の姿、九十四才の大西良慶老師から二十代の宗教青年に至る世代が刻み・現に刻みつつある歴史の一頁、それに仏教各派、キリスト教各派、教派神道等の信仰の発

露を主張しつつ、その相違をこえた宗教者の団結のありさま等、貴重な近・現代宗教史の側面が語られている。日蓮宗関係者では、細井友晋師「今日における宗教者のたたかい」、三谷会祥師「心に日中不再戦の碑を刻みつつ」、中濃教篤師「ベトナム戦争と宗教」、近江幸正師「原水禁運動の統一と前進を願って―『折鶴行脚』の経験から」、遠藤教温師「たちあがる宗教青年の決意」の執筆がある。本書は、第一章・内なる心の平和から外なる世界の平和へ、第二章・たちあがる宗教者、第三章・ベトナム戦争と宗教者、第四章・宗教者平和運動の課題と展望に、分れている。

第一章では、戦時下における大本やホーリネス弾圧の実相や体験が記されているが、特に壬生照順師の新興仏、青弾圧事件の記述は、治安維持法にもとずいて、政治権力がいかにきびしい抑圧を行なったか、を体験的に明らかにしている。「われわれの信仰は不義と妥協することではなく、不正に対して、怒り、これと闘うものでなければならぬ」という意見は、風雪に耐えてきた師の言葉だけに一層の説得力を持っている。同じく高木幹太牧師(北千住教会)が神は現実の矛盾の解決のために戦う人間になることを教えている、として、信仰と社会科学にみちびかれた実践に取

組んでいることや佐藤行通師（日本山妙法寺）の厳しい競争責任の反省と「人間の苦患と対決」する実践的態度は、両師とも法華経に縁の深い人だけに興味あることである。

第二章は、宗教者平和運動の実践記録である。沖繩から靖国法案反対行動まで、多くの活動が語られている。ここでは「消えざるタイマツを灯しつづける決意」がつづられているが、困難を甘受して活動する求道の姿を伝えている。第三章は、ベトナム戦争を宗教者はどう見るか、を集めた現実直視の歴史と理論篇である。この章は比較的紙数も多く、鈴木徹衆師「爆撃下のハノイを訪ねて」、中濃師「ベトナム戦争と宗教」は、一、二章が「偈文」であるのに比し、「長行」の部類に入っているもので、整理された論体である。第四章も「長行」の歴史篇で、日本宗教者平和協議会のあゆみや近代宗教運動の中の宗平協の意義、信教の自由を守る闘い、それに宗教者平和運動の課題と展望等が記されている。この章によって運動の実態に多少ともふれることができよう。

本書の全般的部分に関しては、大西清水寺貫主の「序にかえて」を一読することによって知ることができる。宗教者は「多くの困難な事態をたえ忍んでゆく決意」を持ち、「正道をすすめる強者」となって平和運動を進めよ、とい

う「忍辱のよいを着る」ことの姿勢（「忍者強」）「古くは日蓮や法然、親鸞上人の如く、近くは南ベトナムで焼身抗議された高僧のごとく、その教義、信条の権威を保持するために身を捨てて権利の抵抗をされた」という、権威を妨げるものに抵抗する「権威の抵抗」によって、宗教の権威を保持する精神は、共感すべき指摘であろうと思われる。

本書は、戦争準備の思想攻勢が強められ、今日あらためて宗教者のあり方が問われている状況の中で出されたものであり、戦争反省、魂の遍歴、弾圧に対する抵抗、ひたむきな実践経験の「語り」によって、現代宗教者の平和への姿を示すことに成功している。しかし、平和の言、いい易く、行じ難し、の感こそ、今日の宗教者の状況である。執筆者はなんとといっても、先進活動家であり、各派、各団体との連帯はもとより、各教団内部におりながら、平和を求め、祈り、良心的に宗教のあるべき姿を志向している教団人とのつながりを強めていくことが要請されよう。そのためには、現実的な課題に直線的に対応するだけでなく、伝統的な教団体質を見すえた上での宗教改革運動への展望を開拓する責務を同時に持たねばならないだろう。教義的問題と平和実践との関連、宗教者平和運動と教団民主化との

結合等の課題の追求が一層促進されることが望まれる。「殺すな、殺させるな、殺すことを許すな」の原則も、現実的には「殺すことを許している」状況と表裏の關係にあり、戦争反省、罪業の自覚を媒介することによってのみ、その倫理的規定が宗教的なものに転化しえるのであり、戦争責任の深化を継続的にいく世代もの人々、特に若ものの心呼びかけていくことによって、宗教者が平和を求めて涌出した刻印を止めたものである。本書が心の平和と外なる平和の不可分性を強く打出しつつも、その接点をどのように構築するのか、という点が不十分な事に今一つの不満をおぼえる。また本書では、日蓮宗世界立正平和運動本部が、原水禁運動、被爆者救援運動を行ない、宗平協組織化へ参画した事実がとり上げられており、この伝統と成果を發展させることが重要であることを示している。本宗に属する教団人にとって、現代における立正安国とは何か？日蓮宗にとって立正平和の推進はどんな意義をもっているのか？改めて問われるべきことであろう。

本書は、紙数の都合や執筆者を網羅したためか、一人ひとりの執筆部分が少なく、充分意が尽くされていないのが残念である。ともあれ、宗教者平和運動の評価は別にして、この運動への理解を深め、その輪かくを知る上で一読

しておくべき書である。平和への実践の書であることが、同時に求道の書としての特徴ともなっており、これからの宗教のあり方を探るためにも、大方の精読をお進めしたい。(新日本出版刊)

石川 康 明